

内 報

(7)

平成 30 年 9 月 10 日

世界救世教 ☉ 之光教団

目次

まえがき	5
「全く新しい信仰」は、み教えを否定しているのでしょうか?	6
Ⓢ之光教団 責任役員会	
明主様、御教え、ご浄霊を完全否定し	
明主様のご事蹟からも逆行している『MOA活動』とは?	16
いつのめ教区・広報	
お知らせ	28
いつのめ教区・広報	

まえがき

①之光教団といづのめ教区に対して、自称・世界救世教責任役員会（以下、自称役員会）より、「全く新しい信仰」は明主様のみ教えを否定するものであるとの文書（平成30年8月11日付）が届けられました。また、いづのめ教区に対して、凶悪犯も救われるという教主補佐・岡田真明様のお話に対する攻撃文書（同日付）も、届けられました。

いずれも、明主様のみ教えの一方的解釈による、決めつけであります。「全く新しい信仰」は、教主様を通して明主様からいただいている最も大切な信仰の営みであります。私たちは、今、賜っている信仰を違^{たが}うことなく、真っすぐに受け止めさせていただきたいと存じます。また、教主様がお伝えくださる明主様のみ教えを学ばせていただいて、「全く新しい信仰」の受け止めと実践を許されてまいりたいと思います。

「『全く新しい信仰』は、み教えを否定しているのでしょうか？」（6頁）と、「明主様、御教え、ご浄霊を完全否定し 明主様のご事蹟からも逆行している『MOA 活動』とは？」（16頁）の文書は、「全く新しい信仰」について、①之光教団およびいづのめ教区の受け止めを、改めて確認させていただきたいとの願いで掲載させていただきました。

また、「お知らせ」（28頁）の記事は、親鸞^{しんらん}の悪人こそ救われるという悪人正機説^{しやうき}に関するみ教えの一部分のみをタテに、教主補佐がみ教えに反する言説を唱えているという、自称役員会の主張に対する、いづのめ教区のまっとうな見解を示させていただきました。

私たちは、自分に都合よくみ教えをいただき、それを声高に吹聴することは厳に慎まなければなりません。白紙になって、謙虚に、「全く新しい信仰」をお受けさせていただきたいと、心から願うものです。そのために、教主様のお言葉と教主補佐のお話を、私心なくお受けさせていただきたいとの思いを、ますます強くさせていただく次第です。

「全く新しい信仰」は、み教えを否定しているのでしょうか？

⑤之光教団 責任役員会

自称「世界救世教 責任役員会」（以下、自称役員会）から、「明主様、み教えを全否定した『全く新しい信仰』とは何でしょうか？」と題する文書（平成 30 年 8 月 11 日付）が、⑤之光教団本部に届けられました。

宛名は、「主之光教団執行部 御中」「主之光教団いつのめ教区執行部 御中」「信徒・専従者 各位」となっています。いずれ各拠点および個人にも配布されるものと思われる。

内容は、教主様の「お言葉」は明主様を全否定している、と決めつける内容のものです。特に「メシヤ」「輪廻転生」「浄霊」「地上天国」「聖地」に関してのお言葉を悉く難詰しています。同じ伝で、教主補佐・岡田真明様のお話も、執拗に排撃しています。狭量をもってみ教えを受け止めると、このようなとんでもない小乗的見解になってしまうのか、という見本のような文言が並べられています。

明主様は「裁く勿れ」のみ教えを、繰り返しお説きくださっていますが、私達は畏れをもって神様に心に向けさせていただき、明主様に倣わせていただいて、真摯に信仰させていただくことこそが大切であることを、教主様によってご教導いただいています。自分の中に厳然と存在しておられる神様に通じる道は、自分の信仰の中にしかありません。

また、今回、自称役員会が噛みつくように攻撃している「メシヤ」「輪廻転生」「浄霊」「地上天国」「聖地」については、教主様を通していただいている明主様からのお導きを、しっかりと受け止めさせていただくことであり、今、私達の「新しい信仰」にとって基軸とならせていただくものです。ここに、もう一度確認し、学ばせていただきたいと思います。

1. 「メシヤ」について

東方之光およびいつのめ教団小林執行部、そして両教団によって構成される自称役員会は、教主様が誰でも「メシヤになれる」と仰ったとして、み教えにないことであると攻撃し、自分たちの解釈のみが、明主様のみ教えであると豪語しています。

しかし、教主様は一度も「メシヤになれる」と仰ったことはありません。「もし神さまが私たちを天国に迎え入れてくださるならば、私たちは神さまの子ども、つまりメシヤとして、新しく生まれることができる」と信じています」と伝えてくださっています。（「世界救世教のマーク」より）

「メシヤ」については、教主様のお言葉に基づいて、昭和29年6月5日の「明主様御言葉」を受け止めさせていただくことが大切であると思います。

明主様は、御言葉の冒頭で、次のようにみ教えくださっています。

ずいぶん若くなってるよ私のほうは……メシヤ降誕と言ってね、メシヤが生まれたわけです。言葉だけでなく事実がそうなんです。私も驚いたんです。生まれ変わるといふんじゃないですね。新しく生まれるわけですね。

教主様は、明主様が「ずいぶん若くなってるよ私のほうは」と呼び掛けてくださっていることを、“お前たちは、どうだい？”と訊ねてくださっているのではないでしょうかと、お伝えくださいました。

「新しく生まれる」ということは、明主様において成されたことではありますが、“お前たちも、無関係ではないんだよ”と仰ってくださっているということではないでしょうか。

明主様は、昭和29年4月に、ご浄化に入られて以降、側近の方々に、「私のまねをするように」と度々仰せになったということでもあります。明主様には、ご自分と他の人を分けよう、あるいは距離を置こうとするお考えが全くなかったのだと拝察されます。“私と一緒に歩んでくれよ”というお気持ちであられたのではないのでしょうか。

明主様がハッキリとお示しになった「メシヤが生まれた」「新しく生まれる」との御言葉にお応えする営みを、教主様は、今、私たちに「誓いの言葉」を奉唱することをもって、お導きくださっているのだと思います。

世界救世教 ⑤之光教団の信徒である私たちは、明主様を模範として、神さまの子どもとして新しく生まれることをめざしています。

私たちは地上に生まれた時、この世の両親の子どもとなりましたが、今度は、永遠に生きていらっしゃる神さまの子どもとして、もう一度、新しく生まれなければなりません。

私たちがこの世の両親から名前を付けられたように、神さまも、私たちを天国でお生みになった時に、私たちに名前を授けてくださいました。

私たちは、その名前がメシヤであり、すべての人は、神さまの子ども、つまりメシヤとなるためにこの世に生まれてきたと信じています。

(「誓いの言葉」より)

私たちは、心から「誓いの言葉」を申し上げたいと存じます。奉唱させていただくこと自体が、「全く新しい信仰」の実践であると思います。

2. 「輪廻転生」について

自称役員会は、教主様が輪廻転生りんねてんしょうを否定していると非難しています。しかし、教主様は否定はされていません。このことは「新しく生まれる」との明主様御言葉をどう受け止めさせていただくのかということと、深く関わっている大切なことであると思います。

輪廻転生について、昨年の京都・滋賀布教区信徒大会の質疑応答の中で、教主様は次のようにお答えくださっています。

仏教では、輪廻転生と言って、あらゆる生命が転々と別の形の生命に生まれ変わることを繰り返しながら、永遠に生きていくという考え方があります。

明主様も、人間が生まれ変わるというみ教えをお説きになりました。

しかしながら、明主様がメシヤ降誕をご発表になった、昭和29年6月5日、ご自身のことについて、『生まれ変わるというんじゃないですね。新しく生まれるわけですね』と私たちに明かされたということは、私たちは、本質的に、輪廻転生のように、生まれ変わる存在ではないということ、新しくみ教えくださったのではないかと思います。

私たち一人ひとりの中で、神様によって創造された遺伝的要素は、先祖から子孫へと代々受け継がれていきます。そういう意味において、過去の特定の人々の影響が強く現れることは確かにあります。例えば、明主様が、ご自分は聖徳太子の生まれ変わりである旨述べられたのも、そのような意味でのお言葉であると思います。

しかしながら、私たちの魂は、創造されたものではありません。創造主であられる神様ご自身の魂です。私どもの本質である神様の魂は、決して生まれ変わるものではありません。私たちは、この世を去った後、再びこの地上に戻ってくることはないのです。

ですから、今まで魂を自分のものとしていたことに気付かせていただき、明主様がなされたように、私たちも悔い改めて、メシヤの御名みなにある神様の赦しゆるをお受けし、天国に立ち返って、魂をお返し申し上げ、改めて神様の魂としてお受けさせていただくことが「新しく生まれる」ことであり、永遠の生命いのちを獲得することでもあると思います。

明主様が、『生まれ変わるというんじゃないですね。新しく生まれるわけですね』と私たちにみ教えくださったということは、永遠の生命とは、生まれ変わり死に変わりつつ命が受け継がれていくという意味での永遠の生命ではなく、私たちが、神様の魂をお受けし、永遠に存続する神様の子供として「新しく生まれる」ことこそが、永遠の生命だということに気が付いてほしいからである、と思います。

また、教主様は、生まれ変わるのではないということについて、昨年の秋季大祭でも詳述されています。例えば次のように仰せです。

「明主様ご自身が重大な意味を持つ御言葉の中で、『新しく生まれる』のであって、生まれ変わるのではない、と仰せになっているのです」

「しかしながら、先程申し上げました、昭和29年6月5日の明主様の御言葉をお受けし、改めて人間の命について考えますと、私どもが生まれ変わりがあると言う時、それは、限りある命、死を免れ得ない命を前提としているのではないのでしょうか。

私どもは、人の命は限りあるものと思い込んでいるからこそ、この世を去った後、再び地上に戻ってくると考えるのではないのでしょうか」

「明主様は、生まれ変わるのではなく、新しく生まれる、と仰せになりました。

その御言葉を賜ったものとして、私どもも、明主様に倣って、生まれ変わるのではなく、新しく生まれるものにならせていただきますよう」

教主様は、明主様が「『新しく生まれる』」のであって、生まれ変わるのではない、

と仰せになっている」ことを、真っすぐに受け止めておられます。このお姿に、私たちは倣わせていただきたい、と強く願うものです。

3. 「浄霊」について

「浄霊は二の問題」と明主様がみ教えになられたことを、自称包括役員会の方々は、どうしても認めたくないようです。

教主補佐が、「浄霊は二の問題」について仰っていることを、教主補佐が浄霊をないがしろにしているかのごとくに論じています。

しかし、このように明主様がお示しくださったことは事実ですから、曲げようがありません。また曲げてはならないことであります。

このことは、奉仕者の座談会（「地上天国」68号）の中で、明主様から特に何度も言われたこととして、次のように語られています。

- ・「これから想念の世界である。御浄霊は二の問題で、まず想念である。お念じなさい」と、度々おっしゃられました。
- ・「今迄とは違う。これからは特に想念が大事なのだ」という意味の事をおっしゃられ……

教主補佐は、「まず想念である」「これからは特に想念が大事なのだ」と仰せになった明主様のみ教えを大切に受け止めておられる教主様のお心を、ご自分もそのごとくお受け止めになり、そのことを私たちに伝えてくださっています。そこに、どのような間違いがあるのでしょうか。何の問題もありません。

私たちは教主様のお言葉に、明主様のみ教えに真摯しんしに向かわれている教主様のお心を感じさせていただくのみです。ご自身が受け止められたことを、私たちに率直に語ってくださり、伝えてくださることに、感謝申し上げるのみです。

そして、教主補佐がそのような教主様のお姿を、私たちにストレートに伝えてくださることは、誠にありがたいことであります。

「浄霊は二の問題」との御言葉は、奉仕者の座談会（「地上天国」68号）で語られていることを、予断を持たずに、そのまま聞かせていただくことであると思います。そうすれば、明主様のご本意は、自ずと感あじさせていただくのではないのでしょうか。

教主様のご教導の真意も、受け止めさせていただけるのではないのでしょうか。

4. 「地上天国」「聖地」について

自称役員会は、教主様と教主補佐が、み教えと違う「地上天国」論を打ち出し、地上天国建設のご経綸上不可欠な「聖地」を否定しているかのごとくに、論を展開しています。教主様と教主補佐の仰っていることの数行を取り上げて、アレコレ難じています。しかし、これはナンセンスです。

教主様は、本年のいつのめ教区の世界平和祈願祭・祖霊大祭において、

私は、明主様が主神を心の底から信頼し、その主神にひたすらお仕えになる思いに触れさせていただきたい、そして、少しでも主神の思いに近づかせていただきたい、と思っております。

と仰せになっています。私たちは、この教主様のお心をお受けしたいと強く思います。

ところが、自称役員会の面々は、この教主様のお気持ちを認めたくないのです。明主様の信仰とは関係ないことだ、むしろ明主様に反している、としたいのです。しかし、信仰の世界において、このようなことは許されません。

私たちは、「地上天国」「聖地」についての、次のようなお言葉を大切に受け止めさせていただきたいと思えます。

明主様は、天国という目に見えない聖地の、目に見えるひな形として、地上に聖地を用意して下さいました。

地上にどんなに沢山聖地があろうとも、その中心である目に見えない聖地は一つであります。

その聖地は私どもの中で光り輝いています。そこに主神も明主様も生きておられます。
(ブラジル／祖霊大祭 平成 21 年 11 月 1 ～ 2 日)

明主様は、「地上天国在吾心」（地上天国^わ吾が心に在り）という御書^{おんしよ}をご揮毫^{きごう}になり、私ども信徒にお与えくださいました。

このことは、明主様が、命の源である天国が、地上にいる私どもの心の中に、

今も存在していることを教えてくださっているものと、私は受けとめております。

だからこそ、明主様は、「永遠に冬なき夜なき天国に世人救はむはや来れかし」というお歌をお詠みになり、すべての人に救いの手を差し伸べようと、冬もなく夜もない天国、すなわち、一人ひとりの心の中心に宿る永遠の天国に、早く立ち返って来なさい、と呼びかけてくださっているのではないのでしょうか。

そして、その天国に少しでも心を向けることができるようにと、万人が集い、憩うことのできる聖地を「地上天国の模型」として用意してくださったのではないのでしょうか。

天国は、私どもの心の中心に確かに存在し、永遠に光り輝いております。

(平安郷第二期造営竣工祭並びに第三期造営祈願祭 平成 24 年 4 月 6 日)

こうした地上の聖地だけではなく、私どもの意識の中心には、地上の聖地の源である永遠の聖地が存在しております。

私どもがいつどこにいようとも、自分の本籍地は、この永遠の聖地にあることを信じ、全人類とその父母先祖の方々と共に、そして、万物と共に、永遠の聖地の管理・監督者であられる明主様を通して主神のみもとに立ち返らせていただきます。 (新年ご挨拶 平成 25 年 1 月 1 日)

私たちは、教主様のお言葉を通して、このように明主様がお導きくださっていることを信じ、全く新しい「地上天国」樹立の信仰に努めてまいりたいと思います。

5. 「利他行」について

教主様は、徳積みや利他行を古い教えであるとして否定している、というのが自称役員会の論のようです。教主様はそのようなことは、仰っていません。このことは、明主様の「利他」に関するみ教えを、どのようにいただくかということでもあります。

このことについては、教主補佐が、明快に、明主様の「利他」のみ教えの受け止めをお話してくださっています。

(以下、「岡田真明様と若手専従者との懇談会」より 平成 28 年 4 月 14 日)

明主様は、『感じの良い人』などでも利他愛の精神が根本だ、ということをおっ

しゃっているとすると、明主様にとって利他愛とは何か、ということがあると思うんですね。でも、少なくとも、明主様にとっては、いわゆる普通世の中で言う「利他」ということで「利他愛」という言葉は使っていない、ということですよ。

御教えの続きですが、そのように大乘、ということでも利他の信仰で今までがんばってきた。そして、そのようにして

世界人類の為に尽すと言う事は一寸間違ってはいないように見えますが斯ういう信仰や、斯ういうやり方で各時代に多勢の人が散々やって来たのでありますが今日迄理想世界が実現しなかったという事は、駄目だという事を瞭かに証明しております。

利他、ということ、自分のことよりも人よかれ、ということでも人のために尽くす、それを今までがんばってきたけど、理想世界はできなかったじゃないか、と、それは明らかじゃないか、と。いわゆる利他的信仰ではダメだ、とそういう本当に厳しい内容のお言葉ですね。

続いて、『正愛と邪愛』の御教えを少し読んでみます。

正愛に属するものとしては、夫婦、親子、兄弟等の家庭愛はもとより、友人、親戚、知人等に対する普通人間としての愛は、それがいかほど昂まっても別段非難するところはない（中略）家庭愛や周囲愛は小乗的愛で、利己愛の部に属するが、一般人はこの種の人が一番多く、いわゆる普通の善人型で、無信仰者にもあり、別に非難の点はない

どうですか？衝撃的ではないですか？

まず、家庭愛とか、あるいは、友人とか知人とかの身の周りの人たちに対するそういう周囲愛はどんなに強くても、まあ別に普通ですよ、とおっしゃっている。そして、そのような身の周りの人たちに対する周囲愛は、「利己愛」、とおっしゃっている。

じゃあ、明主様のおっしゃる利他愛とか大乘愛って、一体なんなんですか、ということになると思うんですね。それは、たとえば、『大乘愛』の御教えの中で、

では大乘愛とはなにかというと、これこそ人類愛であり、世界愛であり、神の愛である。

と、こういうことですね。

明主様のおっしゃる大乘愛、つまり本当の利他愛は、やっぱり、神の愛、なんですよ。利他愛は神の愛、なんですよ。明主様の御教えを読ませていただくと、どうやってもそこにしか結論はいかないと思うんです。

また、『大乘たれ』の御教えでは、

愛にも神の愛と人間の愛とがある。すなわち神の愛は大乘愛であるから、無限に全人類を愛するが、人間愛は小乗愛であるから、自己愛や自分の仲間、自己の民族だけを愛するという限定的であるから結論は悪になる。この意味が分かったとしたら信者たるものは何事に対しても、大乘でゆかなければならないわけで、すなわち神の愛をしっかりと胸に畳んでお取り次ぎすること

であると、おっしゃっています。大乘愛は、神の愛、なんだよと。

その神の愛が何かも曖昧あいまいにしておかないほうが良いと思うのですね。それはやはり、さっきからお話しさせていただいている、「赦しゆる」ってということだと思っ
んですね。

教主補佐は、もっと詳述してくださっていますが、明主様の利他愛に関わるみ教えを、私たちがいかに今まで解釈されてきた受け止め方、自分なりの受け止め方で、そのみ教えをいただき続けてきたかを、噛んで含めるようにお伝えくださり、私たちの意識転換を促してくださっています。

この教主補佐のお話の内容は、明主様のみ教えをどのようにお受けするのか、その一点であります。私たちの浅薄なみ教えのいただき方を、懇切に正してくださっています。誠にありがたいことでもあります。

自称役員会の方々は、ハッキリ申し上げて、み教えの拝読が足りません。全くなっていない。自分の都合の良いみ教えを、都合の良いところだけを読み続けると、どういふ信仰者になるのか——という見本のような姿が、そこにあります。

世界救世教の信仰は、一方的解釈しか許されないような硬直した信仰ではありません。そのような非寛容な信仰ではありません。

私たちが望むのは、明主様が本当に私たちに伝えてくださろうとした「真実、であります。その「明主様の真実、は、そのような硬直した、非寛容な信仰の中にはありません。あろうはずがありません。

私たちは、教主様を通して明主様からいただく「全く新しい信仰」の道を許されています。明主様のみ心とみ教えを、純粹に真摯しんしに求めて歩ませていただく信仰の道であります。主神の永遠の命の中に解放され、主神の永遠の命の中で生かされている信仰の道であります。

この道を、教主様のお姿とお言葉に倣うことを徹底させていただいて、迷うことなく進んでまいりたいと存じます。

以 上

「明主様、御教え、ご浄霊を完全否定し
明主様のご事蹟からも逆行している『MOA活動』とは？」

いづのめ教区・広報

先日8月11日、自称・世界救世教責任役員会名で、①之光教団と私どもいづのめ教区が、明主様を否定しているとの文書が出されました。

誤字等のミスが多く、また、文章そのものも稚拙であり、教主様が、`メシヤになれることを否定している、という何を批判されたいのか分からない支離滅裂な表現や、噂や想像をもとにした話で人を徹底的に貶^{おとし}めている様を見ると、いつもながら呆れるばかりです。品性がここまで墮した者が「世界救世教」を名乗っていることに、明主様に対し申し訳ない気持ちになります。

そもそも、彼らは、教主様、真明様、そして私ども①之光教団に籍を置くいづのめ教区が、世界救世教とは無関係であると主張しているにもかかわらず、なぜ私どもに対して次から次へと文書を届けてくるのか、理解し難いことです。

先日の真明様批判の文書には、「包括役員会は、このような岡田真明氏の発言に基づく教会長指導の実態を看過することはできないと判断し…(いづのめ教区が) 今日、最も社会が警戒する危険思想、教団と見なされることを指摘し…いづのめ教区の信徒教化の責任者である、白澤代表、川谷副代表の見解を求めます」とあります。

自称・世界救世教包括役員会にとって、信徒でもなく、まったく無関係であるはずの岡田真明様、そして、包括・被包括関係を廃止し、世界救世教ではない①之光教団・いづのめ教区に対し、このような文書を送ってくる意図は一体どこにあるのでしょうか。

教主様への「尾行・盗聴・盗撮」を実行・容認し、世界救世教で定めている規則・教規をないがしろにした組織運営を行い、今や彼らにとってまったく関わりのないはずの方々や団体に対し、さかんに誹^{ひぼう}謗中傷の文書を出す団体のほうが、よほど社会が警戒する危険思想集団だと思えます。

もし親切心からこのような文書を私どもに届けているのだとしたら、余計なお世話の一言しかありません。

自称・世界救世教責任役員会やいづのめ教団小林執行部は、教主様は教主ではない、真明様は信徒でもない、①之光教団は世界救世教ではない、離脱派だ、と口では言

いながら、何かあるとすかさず「岡田陽一氏は！」「岡田真明氏は！」と言いたくて仕方がないようです。そのこと自身に彼らの行動の大いなる矛盾があります。心の中では教主様・真明様のことが気になって気になって仕方がない、というのが本心なのでしょう。哀れだとしか言いようがありません。

私どもが明主様を否定している、という8月11日付の文書には、冒頭に、小林昌義氏からの聞き取り情報を載せていますが、この人物は、『特報』においていくつもの虚偽情報を垂れ流し続けた人物であり、その者が、証拠もなんら示さず教主様を貶めている言葉の中に、真実性が含まれていることなどあり得ないと考えたほうがよいでしょう。

特に、小林氏は、`『特報』に虚偽は一切ない、`教主様への尾行情報について何も知らなかった、`明主様に誓って嘘ではない、と、明主様や信徒に対して直筆の署名をもって誓いを立てておきながら、様々に出回っている情報によりますと、実際は事前に、いづのめ教団の中枢を担っている方々やメディア情報部職員2～3名と共に、東京都内において、東方之光の尾行情報を共有していた、ということがささやかれています。

もしこれが事実であるならば、小林氏は、「教主様への尾行情報は寝耳に水だった」と『特報』内で宣言しながら、実は、明主様に偽りの誓いを述べているという、極めて厚顔無恥な方であるどころか、本当に明主様の信徒であるのかどうかを疑わざるを得ません。

この8月11日付文書は、東方之光・MOAが作成したと思われませんが、中身は、いつもながらの御教えの表面的理解に終始したもので、教主様・真明様のご教導の一部分のみを取り上げ、「ここが御教えと違う、それに同調しているあなたたちは明主様批判をしている、我々の問いに回答せよ」と、ヒステリーを起こしているのかと思うほど、追い詰められた、精神的余裕の感じられないものです。

また、明主様のみがメシヤであると断定し、イエスをキリスト（メシヤを意味するギリシャ語）と信じる20億人を擁するともいわれるキリスト教徒を完全に敵に回す発言をしています。そのような認識で、どのように全人類の救済を成し遂げようというのか、不思議でなりません。

明主様が世界救世教開教の折、「これからが神の実力が発現される時期に入って

きたといえる、西洋においてはキリストもさぞや本来の実力を発揮されること
と思う、^{しか}而して東洋においてはメシヤがほんとうに御神力を発現されることと
確信する、だから従来のような宗教的観念ではとうてい理解できない」と述べら
れたこと、また、`メシヤが再臨のキリストである、とのお言葉は、明主様の御教え
の奥深さを示しているものです。このように、私ども人間の知恵では到底理解するこ
とのできなかつた明主様の御教えの奥義をご教導くださっているのが教主様・真明様
であり、私どもは、お二人に心より感謝しています。

どちらにしろ、もし本当に教主様・真明様のご教導が間違っていると思うならば、
一部分だけではなく、そのありのままのすべてを東方之光の信徒の末端にまで公開す
ればよいと思うのですが、お二人のご教導に秘められている明主様の真実に触れる
方々が現れるのを恐れているのでしょう。いつも自分たちに都合の良い部分だけし
か引用しません。特に、お二人が、御教えをもとにお話しされている部分については
一切触れていないのも彼らの特徴です。御教えに基づいてお話しされていない、とい
うイメージを植え付ける目的のためとはいえ、彼らのやり方は卑劣極まりないもので
あると同時に、彼らの姿は惨めなものです。

真明様が、本年4月24日付「ご返答」文書で明快に記されましたように、自称・
世界救世教責任役員会の方々は、「明主様を信仰していると言いながら、教主様への
尾行・盗聴・盗撮という恥すべき行為、言葉に出すのも憚られる^{はばか}行為を実行、容認さ
れており、教義を語る以前の問題」であり、私どもとしても、彼らの問いには答えたく
ても答えられないのが現状です。

彼らの目的は、教主様・真明様を徹底的に批判し、^{おとし}貶めることです。その彼らに、
なにを、どのように、いかに丁寧に説明をしたとしても、彼らは私どもの一部の言葉
を引用し、言葉尻を捕らえ、揚げ足を取り、都合の良い御教えを利用しながら自らを
正当化し、さらに教主様・真明様、そして私どもいづのめ教区に批判の限りを尽くす
ことでしょう。

東方之光・MOAが疑問視し、指摘していることの多くが、教主様お言葉や真明様
お話の全貌を拝読すれば理解しうるものであり、その点からもまともに相手にする必
要のない文書であります。しかしながら、悪意をもっていづのめ教区の信徒にこのよ
うな情報を流してきている以上、私どもとしましては、この文書をもって私どもの見
解をお伝えしている次第です。

いつのめ教区の信徒の中で御教えやお言葉に疑問の声がありましたら、今後執り行います教主様のご巡教等様々な場で、直接教主様にお伺いする機会がございますので、ご安心くださいますよう、お伝えいただきたいと思えます。

東方之光・MOAは、様々な高圧的文書を通して、教主様・真明様、そして私どもいつのめ教区に罵詈雑言ばりぞうごんの限りを浴びせてきていますが、一体MOA活動とはなんなのでしょうか。

本年8月10日付、「東方之光・MOA役員会」名の㊦之光教団執行部宛の文書の中に、次のような表現があります。

東方之光・MOAが展開する幅広い活動は、「大日本健康協会発会式御講話」（昭和11年5月15日）のみ教えにおいて、その発会の目的を「例えば、キリスト教、天理教の人などは、観音様という躊躇する。（中略）今までは救われる門が一つしかなく狭かった。今度はもっと広い、入りいいものが、も一つできたことになる」

MOA活動は、このように明主様が仰ったことを根拠としているので、世界救世教の信仰を根底から変質させようとしているのではない、と弁明しています。

また、「MOAインターナショナル」のホームページにおいては、明主様を「MOAの創始者」と位置付けていますが、明主様がMOAを創始された事実は当然のことながら一切なく、そもそも明主様は、「MOA」という言葉すらお使いになったことはありません。

東方之光・MOAは、教主様のお言葉につき、二言目には「御教えのどこにあるのか」と言いますが、「MOA」という言葉が御教えのどこにあるのか、示していただきたいと思えます。

さらに、MOAインターナショナルのホームページには、「明主様は、大日本観音会を発足されたものの、多くの方が活動に参画できる組織でなければならないという強い信念で、「大日本健康協会」を創立して、それが今のMOAとなった、旨書かれています。

語るに落ちるとはまさにこのことでしょう。

私どもは、1935年1月1日の大日本観音会としてのご立教の日を何より大切に

していますが、彼らは大日本健康協会を重視し、宗教行為をやめて浄化療法に専念されたことが明主様の真実であり、願いであるというのです。明主様のご昇天に至るまでのご事蹟のどこをどのように学べばそのような結論に達するのか、言葉もありません。

そもそも大日本健康協会が発足した経緯は、『岡田茂吉全集』や明主様の伝記である『東方之光』を読めば一目瞭然ですが、宗教活動を抑圧する官憲の厳しい取り締まりに対処するという目的が背景にあり、明主様が、`多くの人が活動に参画できる組織でなければならないという強い信念、から発会されたのではないことは、明主様のその後の歩みを見れば明らかです。

大日本健康協会は、1936年5月15日に発足しますが、その約ひと月半後の7月28日には、警視庁から療術行為禁止の命令を受けて事実上の解散となります。その後、戦後新たに施行された宗教法人法において信教の自由が確保されるまで、明主様のご活動は極めて制限されることとなりました。

しかし戦後、ひとたび信教の自由が保障されると、明主様は、1947年8月30日、宗教法人「日本観音教団」を発足されました。

もし明主様が、大日本健康協会当時の「キリスト教、天理教の人などは、観音様という躊躇する」というお考えをその後も継続してお持ちであったならば、決して「観音」という文字を新しい組織名にお付けにならなかつたでしょうし、ましてや宗教法人になどされなかつたはずです。大日本健康協会を発足されたことは、明主様にとって本意ではなく、一時的な措置であったことは火を見るより明らかです。

『東方之光』には、日本観音教団発足について、次のように書かれています。

「日本観音教団」発足時において改められたのは組織ばかりではなかつた。宗教として再出発した教団においては、それまで「治療」と呼ばれていた浄霊は、「お浄め」と呼ばれるようになり、さらにすぐ「浄霊」と改められ、「お守り」はたてが経書きの「光」、「光明」、「大光明」となった。

また二三年（一九四八年）一月からは、『善言讃詞』が奏上され、「讃歌」の奉唱が行なわれることとなった。久しい間、仮の姿をとって行なわれてきた神業は、ここに名実ともに宗教の形態を整え、その活動にはいった。

教祖の指示に基づき、「大光明如来」と漢字で書いた神体に向かって、「みろくおおみかみ」と神名を唱えるように改められたのも、この時期のことである。

(中略)

こうして指圧浄化療法という民間治療から、「日本観音教団」という宗教法人へと一大飛躍が行なわれたのである。しかし、会員の一部に動揺が起きた。自分の悩みが救われればそれでよいという心の人々は、人類を救い、地上を天国化するという理想を聞かされて、かえって不安を感じた。また、浄霊を療術と考えるにとどまり、その背後に神の存在と、人類を救おうとする神の愛を見出すことのできなかつた人々の中には、宗教への飛躍にさいして「だまされた」と受け取る人も多かった。また、知識人の中には、浄霊の偉大さは体験しながらも、それが神の力であると認めることは、自分の信条とする唯物的な世界観と相容れない^{あいい}と考える者もあった。また、自分が新興宗教にかかわりをもつことが世間的な体面にさしさわりがあると思った人々もいたのである。

こうして「日本浄化療法普及会」の会員のうちから、かなり多くの人々が、「日本観音教団」の発足に伴って離れていったのである。

このように明主様は、会員数が減少することをいとわず、社会に受け入れられやすい浄化療法を捨て、「観音」の名前を冠した宗教法人を発足させて宗教活動に専念されました。

もちろんその後も宗教形態をお捨てにならず、ご神業の進展に伴って、「日本観音教団」から「世界救世教^{メシヤ}」を開教され、その中で、「観音はメシヤとなった、と訴えられ、メシヤというお言葉、お名前を非常に大切にされてきた現実があります。

明主様は、

私が以前から宗教をやりたいと思っても、終戦前はてんでどうする事もできなかった。それでしかたなしに浄化療法という民間療法でやっとやっていた
『御教え集17号』(昭和27年12月17日)

時代には新宗教というのはとてもやかましいので、手も足も出ないので、宗教という事は言えなかったのです。そこで治療ですが、日本浄化療法という民間治療でごまかしていたのです。(中略)それが終戦になって、よいあんばいに信仰の自由が許されたので、二十二年八月にやっと宗教法人と

して宗教的にやる事を許され、それから本当の活動を始めたのです

『御教え集 2 3号』(昭和 28 年 6 月 16 日)

と、浄化療法的あり方ではなく、ご浄霊として、宗教として、ご神業をお進めになりたかった明確なご意思を表現しておられます。

これらのご事蹟、御教えを見つめさせていただければ、MOAが、宗教法人を発足された明主様の御心を完全に無視した教義違反の思想・活動であることが、はっきり分からせていただけます。

時代を超えて御教えに貫かれている明主様の御心を求めていらっしゃる教主様のお言葉を、東方之光・MOAは「異質な思想」と断じていますが、実際は、ご本人たちの思想そのものが、明主様の御心を真っ向から否定している「異質な思想」どころではなく、明主様のご事蹟と逆行している団体なのです。

明主様が浄化療法を取りやめられたことを覆す御教えやご事蹟を彼らが提示できていないことが、その何よりの証左です。

また、東方之光・MOAが管理している様々な施設などにおいては、極めて不遜なことに、明主様を、単に「岡田茂吉」として呼び捨てで紹介しているところもあります。明主様は、一般社会に対し、ご自分を紹介するのは、「明主様」としていただきたい旨明確にみ教えくださっています。

(明主様を知らない一般大衆の場合に、明主様の御名を申し上げるときはなんと申したらよろしいでしょうか。) 明主様で良い。(一回や二回ではのみ定めない場合がありますので) 一回でのみ込めますよ。ただ、以前に大先生と言われた時分に、頭にこびりついた人は少しはあるが……明主様で良いですね。岡田先生では変だしね。岡田先生というのは世間ではたくさんいるからね。

(御垂示録 2 号 昭和 26 年 9 月 8 日)

このように、東方之光・MOAは、「岡田茂吉」とすることによって明主様を否定し、「浄化療法」とすることによってご浄霊・御教えを否定し、「MOA」とすることによって、明主様のご事蹟そのものを完全に否定しています。

東方之光・MOAは、教主様を追放するにあたり、お言葉は御教えと違うことを証

明するため、さかんに御教えを引用していましたが、ご自分たちの活動がここまで御教え、ご事蹟を否定している事実はどう考えているのでしょうか。

今回取り上げました「世界救世教責任役員会」名の8月11日付の文書は、このように締めくくられています。

（この文書に対して）「回答があった場合には、その内容を皆様にご報告いたします。」

是非、お願いしたいと思います。この私どもの文書を、東方之光・MOAの信徒に幅広く広報していただければ、いかに、MOA活動が御教え、ご事蹟、ご浄霊を完全否定している非明主様思想であるかがはっきりとしてよいでしょう。

東方之光・MOAが、御教えは大切だと嘸^{うそぶ}き、いづのめ教団小林執行部が、必死になって自分たちは「明主様派」であると主張するならば、彼らには、「尾行・盗聴・盗撮」を実行し、容認しても良い、「悪事をしてしても良い」、「法を犯しても良い、ということが根拠となる御教えを示していただきたいと思います。そうでなければ、どんなに「御教えだ」、「明主様派だ」と主張しても、それは、「御教え」や「明主様」という言葉を利用しているだけにすぎず、主神・明主様に対するとんでもない不敬でありましょう。

現在、自称包括役員会はホームページを公開していますが、その略年譜からは、明主様のメシヤ降誕の事実が省かれています。

教主様の、「教祖である明主様を模範として、私たち一人ひとりもメシヤとして新しく生まれなければならない、とのご教導を覆す手段がなんらないことの証拠でしょう。

東方之光・MOAは「全く新しい信仰とはなにか提示せよ、とさかんに言っていますが、提示するまでもなく、全く新しい信仰とは、明主様の御教え、ご事蹟すべてを、ありのまま受け止めるだけのことです。

教祖である明主様をどこまでも求め、明主様を模範として、信徒である私どもも、メシヤとして新しく生まれる道を歩ませていただくだけのことです。そうであるからこそ、明主様は、信徒の私どもに対しても、ご自分がされていた尊いご浄霊のみ業、自然農法、芸術を実践することを許してくださったのです。

私たちは、教主様を中心に、世界人類を救うという明主様の御心をしっかりと継承し、明主様に倣い、「全人類が主神の子ども・メシヤとして新しく生まれる、という真の福音を世界に伝え、人類救済の正道を歩んでまいりたいと思います。

以下、御教えをいくつか抜粋しました。これらを拝読すれば、東方之光・MOAの原点であり、拠り所としている大日本健康協会の歩みや、浄化療法のようなあり方が、いかに明主様の本意ではなかったかが明確に分らせていただけます。と同時に、明主様は、宗教を隠すのではなく、表に出すことに喜びをもたれていたことがはっきりと伝わってまいります。東方之光・MOAやそのような活動を容認している自称・世界救世教責任役員会やいつのめ教団小林執行部がいかに御教えを語っても、そこに説得力はあり得ません。彼らは、明主様が、「実に空前絶後の真理の解明であり、寸毫の誤りはない」と仰ったことを引用し教主様批判を展開していますが、彼らには、以下の明主様の御教えを読まれた上で、「寸毫の誤りはない」と仰った明主様のお言葉を、ご自分たちのMOA活動、浄化療法に照らし合わせていただきたいと思います。

『御教え集15号』（昭和27年10月20日）

私の口から言うのはおかしいですが、終戦までは宗教的なことはなにもできなかったのです。「日本浄化療法」という民間療法でようやく仕事をしていたわけです。それが終戦になったために信教の自由が許されるというようなわけで、宗教的な運動もできるようになり、今日のように発展し、『アメリカを救う』という本も出せるようになった

『御教え集17号』（昭和27年12月17日）

中国は、いまはそういう宗教宣伝などはできないのです。それはちょうど日本と同じで、私が以前から宗教をやりたいと思っても、終戦前はてんでどうすることもできなかった。それでしかたなしに浄化療法という民間治療でやっとやっていたようなわけで、宗教的なことはぜんぜん駄目です。それが終戦と同時に信教の自由が許されるというわけで、宗教団体をつくったのです。いずれ中国も、アメリカが日本にしたと同じように、大いにアメリカの民主政治が施されるようになるだろうと思います。そうして信教の自由が許されて、それからが本当の仕事ができるわけです。つまり宗教的の仕事ができるということに

なるだろうと思います。

『御教え集23号』(昭和28年6月16日)

神山荘に初めて越してきたのが昭和一九年五月ですから、まだ一〇年にはなりません。この五月でここに越してきてから九年というわけです。しかし最初は微々たるもので、おまけにその時代には新宗教というのはとてもやかましいので、手も足も出ないので、宗教ということは言えなかったのです。そこで治療ですが、日本浄化療法という民間治療でごまかしていたのです。その時分は当局は信仰というものを非常に恐れたのです。ですからどうすることもできなかったのです。(中略)それが終戦になって、よいあんばいに信仰の自由が許されたので、二二年八月にやっと宗教法人として宗教的にやることを許され、それから本当の活動を始めたのです。

『本教を認識せよ』(昭和25年1月7日)

ここで本教の歴史をかいてみるが、昭和十年一月、大日本観音会の名のもとに宗教団体として発足したのであるが当時は頗る微々たるもので信者の数も数十人に過ぎなかった、そうしてこれより先昭和元年頃靈的治療の研究を開始し、特殊の療法を創成し、昭和九年五月民間療法的に創めたのが抑々でその翌年一月宗教となり、翌十一年弾圧を受け一年数ヶ月浪人生活を続け、昭和十二年秋民間療法専門に再発足したところ、数十人の門弟が出来た為生活の安全を得た事と、当局の取締りがあまりに厳しいので十五年秋廃業する事となった、其後戦争等もあり爾来七年間岡田式浄化療法の名によって技術者養成に専心し、数百人の門弟を造ったのである。

然るに終戦となるや信教の自由が許されたので、廿二(二十二)年八月宗教法人の許可を受け、此時から表面的宗教活動に移ったのである。

『本教発展の主因』(昭和28年9月30日)

我救世教が宗教法人として、表面的活動に発足したのが、昭和二十二年八月であった。何しろそれまでは官憲の圧迫が甚だしい為、知っての通り日本浄化

療法の名によって、民間療法を営業としてやっていたのである。といっても信仰が伴わないと病気の治りも悪いので人によっては私の描いた観音様を拜ませせていた。これなら昔からある信仰だから差障さしさわりがないという訳で、それ程当局は新宗教を嫌ったものである。処が幸いなる哉かな世は民主主義となり、信教の自由も許されたので、茲ここに天下晴れて宗教団体として活動が出来るようになった

『御垂示録14号』（昭和27年10月1日）

いまラジオで選挙の様子を聞いていたのですが、たいてい有名な人で古い人というのは、勿論もちろん当選率が高いようです。岩手県から出た田子一民という人は、有名で古い人ですが、私はあの人を二度か三度でしたが、浄霊したことがあります。それが七万いくらか集めて、最高点で断然群を抜いてます。ところがまたおもしろいのは、鶴見祐輔つるみゆうすけは落選したのです。むしろ有名なのは鶴見祐輔さんのほうが有名かもしれません。で、鶴見祐輔さんも一家みんな信仰に入っているのです。先に「日本浄化療法」の時分ですが、前に一家中教修を受けたのです。ところが「観音教団」になってからパッと来なくなったのです。それからおかしいと思って（近ごろ聞いた話ですが）ある人が聞いたところが、「いや、宗教になったから止よしたんだよ。あれは良いのだが……僕も家中で行ったのだが、宗教になったから、もう止したんだ」と、こういう話なのです。これがおかしいのです。つまり察するに、それは自分が政界やなにかに乗り出して活躍するには、新宗教というものが障りになるという意味だろうと思うのです。そこで私はどうも感心しないと思ってました。もしメシヤ教が悪いものならそれは隠す必要もありますが、自分が良いと思ったら、新宗教でも旧教でも、ちゃんとやるのが本当です。

『ジャーナリストには言論の自由なし』（昭和27年3月19日）

ここでついでだから、これに関連のあるいま一つのことを書いてみるが、それは社会的地位のある人ほど用心深く、本教信者にも大臣級や博士、有名作家などもいるが、どうも秘密にしたがるので、吾々われわれの方でも秘密を守るようにし

ているが、時には信仰を止めたのかと思っていると意外にも陰で熱心にや
る例などもよく聞くが、先日も元国務大臣を何回もやった人で、現在政界でも
噂に上るほどの著名人であるが、この人などはちょっと変わっている。それは
数年前一家族全部入信したほどの熱心家であったのがしばらくするとピタリと
来なくなってしまった。ところが最近分かったことは、この人は本教が、以前
浄化療法時代に入った人で、その後宗教団体になったからやめたというのであ
る。それで分かったことは、政界人としては新宗教の信者になるなどは、大い
に名声に影響を及ぼすからであろう。右は一例であるが、そういう人もずいぶ
んあるようだ。これにみても新宗教はいかに社会的信用が薄いかが分かるので
ある。

以上のような種々な障害がありながら、日に月に見らるるごとく、発展を遂
げつつある事実をみれば、本教の力のいかに偉大なるかが分かるであろう。

『浄化甚しい時指圧するあり』(昭和 24 年 10 月 5 日)

“本教団の内で、以前の浄化療法式で人を導いている会があります。浄化がひどい時
は治療でなければ助からぬと云い、指圧の許可もとってやるからと云ってすすめてお
ります。許可をとれましたら治療をしてもよろしいのでしょうか。御伺い申し上げま
す。”

逆である。浄化のひどい程浄霊する。

『御光話録 1 2 号』(昭和 24 年 6 月 3 日)

“(前略) 教導師が患部に体を用いず、浄霊のみによるべきことは承知いたしおりま
すが、患部以外の箇所をするときや、あるいは疲労した程度の人々をいたします場合、
つい浄化療法時代の魅力が捨てきれず体を併用している者もたくさんありますゆえ、
失礼とは存じながらお伺い申し上げます。”

こりゃあ、違いますよ。浄霊には絶対体を使っちゃいけない。それじゃぜん
ぜん宗教じゃない、民間療法になってしまう。たいへんな間違いですよ。

以 上

お知らせ

いづのめ教区・広報

先日8月11日、自称「世界救世教責任役員会」が、いづのめ教区に対して文書を出してきました。

教主様の意を汲まれる真明様が、全人類、どのような悪人、罪人、殺人者であったとしても、メシヤの御名にあって赦され、天国に迎え入れられ、明主様に倣い、神様の子たるメシヤとして新しく生まれることができる、と説かれたことを非難したものです。また、教主様、真明様と心を同じくする私どもいづのめ教区に対しても、極めて無礼な表現で批判をしています。

事実上、東方之光・MOAが作成していると思われるこの文章の論点は、一言で言えば、「悪人が救われる、という真明氏の主張は明主様の御教えからするととんでもない間違いだ」というものです。その論調は、明主様の親鸞しんらんに関する御教えを抜粋しながら真明様を一方的に裁き、彼らが信仰者であることすら疑わざるを得ないような、品性に欠けた、高圧的なものです。明主様の「裁なかく勿れ」の御教えはどこにいつてしまったのでしょうか。

明主様は、親鸞しんらんが残した「善人なほ尚もて往生おうじょうを遂ぐ、況んや悪人をや」の言葉につき御教えの中で様々触れておられます。その根本としては、「悪人こそ救われなければならない」という意で説いておられます（下記参照）。

東方之光・MOAが、真明様批判文書の中で引用している親鸞についての御教えは昭和10年のものであり、その後、この親鸞の言葉につき、明主様のご理解は変化していきましたが、このことは、御教えにお詳しい方であるならば当然ご存知のことと思います。

「迷信」についての御教えも抜粋していますが、目的が意味不明なため、直接のコメントは差し控えさせていただきますが、まさに、キリスト教において、「全人類の中でイエスだけがメシヤである」という迷信を、「人類みなメシヤの御名に結ばれた存在である」としてその迷信を正しておられるのは教主様であり、私どもの尊いひな型であられる明主様の「メシヤとして新しく生まれた」ご事蹟そのものでしょう。

東方之光・MOAが批判している教会長の「悪人は神様から使われている」というご発言についても、明主様の御教えを少しでも読ませていただければ、明主様のお

伝えくださっている神様は、善と悪の両方をお使いになる神様であることは瞬時に理解できることであり、世界救世教の教義の根幹であることは言うまでもありません。

東方之光・MOAは、御教えについてここまで大上段に語っているので、これくらいのことは本来知っていることだと思いますが、意外にそうでもないのかもしれませんが。御教えを学んだ結果がMOA活動だということ自体、そのなによりの証拠でしょう。MOA活動の中心となる浄化療法にいたっては、明主様が明確に取りやめられたもので、当然のことながら教義違反です。

また、アンゴラの信徒の中に、「自分は教主様のご教導に出会って救われた。自分は内戦に関わり、人を殺したことがあった。もはや救われる見込みはないとあきらめていた。しかし教主様のご教導に出会い、全人類、誰であろうと赦され、救われ、天国に立ち返ることができるという天国の福音を知らされ、言葉にできないほど喜んでいる」という話を、渡辺先生がたびたびしておられたことを覚えている方も大勢いらっしゃると思います。世界救世教の代表役員を自称する長澤好之氏には、是非この信徒に対し、あなたは悪人なので救われないのだ、と伝えていただきたいと思います。

どちらにしろ、もしこの真明様といづのめ教区批判の文書が手元に届くことがありましたら、それをしっかりと読まれた上で、以下の御教えに目を通していただきたく思います。いかに、東方之光・MOAの御教えの理解が、教主様・真明様とは比較にならないかが、よくご理解いただけると思います。当然のことですが。

また、東方之光・MOAがさかんに繰り返しているように、教主様や真明様のお言葉の一部分だけを取り出し、「御教えと違う」という彼らの主張にちょうど合う御教えをいかに都合よく使っているか、よくご理解いただけると思います。

明主様は、善の行ないを推奨し、善人を救われる一方で、明確に、`悪人こそ救わなければならない、`殺人をするような人こそ救う、旨み教えくださっています。

昭和29年6月15日のメシヤ降誕仮祝典においても、明主様は、「全人類の罪をお赦ゆるしくくださいますようよろしく願いいたします」という信徒からの願い出をお受けになってくださいました。言うまでもなく、罪人の赦し、罪人の救いは御教えの根幹であり、救世教の救いの中核を担っていることです。

悪人、罪人が救われることを説かないとしたら、全人類の救済も説かないことになるのですから、東方之光・MOAや自称・世界救世教責任役員会が、明主様のなを世に伝えていこうとしているのかはなはだ疑問であり、彼らの姿は小乗信仰の極致と思われるのですが、これも私どもの中にある姿と思わせていただき、主神に委ねさせてい

ただきたいと思います。

東方之光・MOA、いつのめ教団小林執行部並びに世界救世教責任役員会を自称している方々は、教主様・真明様のご教導を否定、攻撃、排除しているつもりだと思いますが、そうすることにより、実質的に、明主様、そして御教えの否定、攻撃、排除をしていることに気が付かないのでしょうか。

以下に添付した御教えは、真明様や教会長が語っているお話とまったく同内容のものであり、明主様は、`悪人、殺人犯こそ救う、と仰っています。であるならば、彼らにとっては、明主様や御教えは、社会に危惧きくされる存在であるということなのです。

MOAが「岡田茂吉」の名前を使い明主様を隠し、否定をし、明主様が堂々と世に打ち出していた宗教や主神を隠していることから明らかなように、彼らにとって明主様のご存在と御教えは都合の悪いものなのでしょう。MOAの勉強資料が、都合のよい御教えの寄せ集めをしていることは有名な話ですが、そのようにして、自分たちにとって便利な明主様像を作り上げることに労力を費やしていることは、明主様の信徒として誠に残念なことです。

そもそも、彼らが、もし、MOA活動や、明主様がお取りやめになった浄化療法が、彼らなりに明主様の御教え、御歌、ご事蹟を研究した結果に出た結論だと信じているならば、なぜその活動に全力を注がず、このような裁きに満ち溢れた文章の作成に時間を費やしているのか、首をかしげざるを得ません。虚むなしさを覚えないのでしょうか。

同文書の中で、東方之光・MOAは、明主様が「悪は駄目である」とみ教えくださったことに言及していますが、もちろんその通りです。

東方之光・MOAが実行し、いつのめ教団小林執行部が容認している非人道、反社会的、「尾行・盗聴・盗撮」は決して許されることではありません。私どもが立ち上がったのも、この明主様の正義感をお受けしたい、という気持ちからでもあると思わせていただいております。

全人類に対する罪の赦ゆるしという明主様の愛を説いていく私どもと、「尾行・盗聴・盗撮」実行・容認者のどちらが、社会から「危険思想集団」とみなされるか、論をまたないところです。彼らにはまず、尾行等を容認していることに対する「社会への悪影響」を考えていただきたいと願うものですが、もはや社会の常識が通じる相手ではないのかもしれませんが。

しかし、どのような悪事を働いたものでも、心から悔い改めれば天国に入れるのだという福音を説かれたのが明主様であり、そして今、まったく同じ全人類の赦しの福

音をお伝えくださっているのが教主様と真明様です。

このような高圧的な文書を通し、私どもは、いかに教主様・真明様が明主様の御教えの神髓について教えてくださっているかをよりよく分からせていただきたいと思えます。

今後とも、明主様のご聖業を継承しておられ、現界経綸の中心、先頭に立たれている教主様と共に、^う倦まず^{たゆ}弛まず、力強く歩んでまいりましょう。

『大光明世界の建設 光の活動』(昭和10年1月11日)

そういう訳でありますから、光明世界を作るには、理屈や議論は後からでいいんで、先ず第一に、御神体を、お祭りすれば、いいんであります。そうすれば、朝夕拜んでいる裡に、^{うち}魂が、^{みたま}お光に照らされて、どんな悪人でも、不良でも、善道に立還り、どんどん救われて行くんであります。

『^{いざとつねあつ}為郷恒淳氏との御対談 浄霊は信じなくてもできる?』(昭和27年10月22日)

為郷氏 それから神様は悪人を造って、その悪人を救わないのでしょうか。

明主様 いや救うのです。神様は悪人を作っておいて救うのです。救わなければならない必要があるのです。というのは、悪人というのは、要するに、汚いものは^{きれい}綺麗にしなければならないのです。

『御垂示録23号』(昭和28年8月1日)

神様と単純にいうが、神様といっても、一流、二流、三流とありますが、一流の神様はなんでもお許しになります。それは殺人強盗でもお許しになります。それはそうでしょう。戦争もお許しになりますが、これは何十万と殺すのですから、殺人強盗どころではありません。それは一流の神様はお許しになりますが、二流、三流の神様はお許しにならないのです。

『御垂示録20号』(昭和28年5月1日)

前に人殺しということで、^{みやげせつれい}三宅雪嶺の説を読んだことがあります、うまい

ことを言っています。「殺人ということもなくてはならないというのです。もしそれがなければ、いかに人を苦しめるか分からない。しかし殺人というものがあ
るために、人を苦しめるということがある程度でくいとめられる」ということ
を書いてましたが、これは真理です。あんまり酷いことをすると、もしかする
と彼は自分を殺しやしないかということがあるから、ある程度で弱まるわけ
です。ですからそういった殺人というのは善の働きもあるわけです。

『御垂示録26号』（昭和28年11月1日）

前に三宅雪嶺^{みやけせつれい}の説で、殺人ということは必要だ、法律でやるよりも殺人でや
るほうが秩序が保てるということを書いています。人間をウンと苦しめる、法律
に引っかからないようにして苦しめることができる。しかし殺人ということが
あるから、ある程度までしかできないということを書いてますが、その時分
には大乘も小乗も知らなかったが、いまでもそれは間違っていない。これ以上
苦しめると、アイツはオレを殺すだろうというわけで止めます。ですから殺人
が悪いとも言いきれません。

『況んや悪人をや』（昭和24年10月23日）

“親鸞^{しんらん}の言葉に「善人は救われる況んや悪人をや」という事がありますが、そ
れでは悪人の方が救われる事になりはしないでしょうか。

“悪人は救はれる事を諦める事がある。（罪を犯したので畳の上では死ねないと
諦めてる）そういふ者の為に言った言葉で、強く言った言葉である。字通り解
すると大間違いになる。善人は当然救はれるが、悪人を先ず救ふ要がある。悪
人は諦めているもので、それを救ふ為に言ったのである。

『自力と他力信仰、本願寺派と親鸞^{しんらん}、排悪の牧師、観音行の在り方、（従来の日本）、
経緯^{たてよこ}結びと日本』（昭和23年）

親鸞は「善人^{なお}尚もて往生^{おうじょう}を遂ぐ、況んや悪人をや」といふ。之は自暴自棄^{これ}の
者も救はれるといふ訳である。先に私は、キリスト教会の宣教師が善くない者
があるから除名すると言った、之は変だと思った。善い人間ならそれでいいが、

汚れた人間や悪い人間を排斥すれば宗教の意義はなくなる。悪い人間を善くするのが宗教の使命であらうに、^{これ}之は変だと思った。

『御教え集14号』（昭和27年9月6日）

人間はなにかというと、人間の害虫というのは悪人です。これが害虫です。ところが人間が間違っただけをすることからしてその人の霊が穢れる。そうすると人間の霊の穢れを取るために害虫が発生する。ところが人間の害虫というのは、やっぱり人間なのです。人間でそういうのが湧くわけです。そこで悪人が苦しめる……社会を悪くしたりいろいろ苦しめるということは、浄化を受けているわけです。だから悪人が湧くということは、必要があって悪人が湧くのだから、やはり人間が悪い罪を重ねるからで、罪の掃除を悪人がするのです。だから悪人に苦しめられるということは、こっちに苦しめられるだけの罪穢があるのです。それを掃除してくれるのですから、悪人も必要……と言っては少し変ですが、まあ合理的なものです。だから社会悪だとか、ずるい奴や悪い奴がたくさんいるということは、そういう悪人が必要な世の中を作っているわけです。また、悪人が浄化作用して、それがまた悪を作るから、それをまた掃除する悪人ができるのです。

『御教え集31号』（昭和29年2月4日・立春祭）

そういうようで、神様がやられることは実に深いです。ですから「あの人はああいうことをしているから悪い、間違っている」ということは、とても言えるものではないです。そう言っている人は、実はその人自身が悪いことをやっていて、悪いことを言われている人は良いことをやっているかもしれません。お筆先に「一生懸命、神のためと思い、間違っている事をしている人は、神も困るぞよ」というのがあります。「これが神様のためだ、これが本当だ」と言って一生懸命にやっていることが、あんがい神様のお邪魔になっているというわけです。そこで人間、特に信者は、善とか悪とか決めることはたいへん間違っているのです。また分かるものではないのです。ただ、自分が良いと思うことをしていればそれで良いので、人が善いとか悪いとか言う、それが一番危険な

わけです。なにしろ世界人類を救うというのですから、開闢^{かいびやく}以来ない大きな仕事なのです。お筆先に「大きな器には大きな影がさす。だから器が大きくなければ神の仕事はできんぞよ」というのがあります。よほど大きな器で、要するに大局的に見るというわけです。

『寸鉄』（昭和25年12月6日）

集団強盗^{ごうせつとう}百一人も捕まったとは驚いた、だが斯^こんなのは鼻糞^{はなぐそ}位だよ、何故なれば、今や何億万の集団殺人強盗が地球を荒し廻るといふんだからねー、だから俺は斯^こんな物騒^{ぶつそう}な地球から逃げ出そうと思って考えてゐるんだが、そんな好い処は何処にもないので、ヤッパリ地球へ戻って、殺人強盗を改心させやうとするんだ。その大仕事をするのがメシヤ教なんだ、どうだ判^{わか}ったか。

以 上

